

4－6					
主題	入居者自身が最期の迎え方を考え、相談し、形にできる環境づくり				
副題	終末期に向けて入居者、家族と一緒に取り組む死の準備教育				
キーワード 1	終末期	キーワード 2	死の準備教育	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 亀鶴会 特別養護老人ホーム神明園
発表者(職種)	天野あけみ(看護職員)、本山紘子(介護職員)
共同研究(実践)者	大内健史(連携事業部長)、土岐佐千子(介護副部長)、菅原直子(看護職員)

電 話	042-579-2711	FAX	042-579-6868
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	東京の西部に位置する羽村市(人口約5万4千人)に市内3番目の特養として平成11年に開設した従来型施設。定員は120名。居住フロアは2階、3階、4階にあり「地域社会に開かれた園づくり」、「楽しみ」「くらし」～そして「よろこび」の2つを理念に掲げ、全員参加による生活支援の実現を目指している。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当園では看取り体制を2016年に整え、これまで約40名の方を見送ってきた。より良い終末期の支援に向け、入居者を主体として家族と職員と一緒に、死の準備教育(death education)を進めていく必要性を感じるようになった。この点について具体的な方策を模索したところ看取りや終末期に関する先行研究はあったが、高齢者施設内で入居者自身が自分の死に向き合う場を整えたという事例は見つけることができなかったため、独自の取り組みを模索した。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

入居者個人の気持ちを整理し書き留める様式や、入居者同士、また入居者と職員が死について楽な気持ちで話し合える場を新たに作ることで、死に向き合う気持ちや最期の迎え方、そして今をどう暮らしたいかといった希望がより具体化できるのではないかと考えた。その希望を職員と家族が共有することで、本人の意思を尊重した、より質の高い終末期の支援を提供できるのではないかと考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

1. 神明園独自のエンディングノートの様式作成と記入の補助
 - ・高齢者でも容易に取り組めるよう、記入欄の大きさ、簡単な言葉づかい、見やすさ、回答のしやすさを重視しA3用紙1枚のシートに収めた
 - ・介護と看護の担当職員が自ら試験的にエンディングノートに記入し、様式を練り上げた
2. 終活をテーマとした座談会の開催
 - ・希望者が気軽に参加できるよう「終活座談会」と名付けた
 - ・不安や心配ごとに対応するテーマ設定や自由な意見交換を促すなどの配慮を行なった
3. 家族アンケート「園の看取り対応に関する意識調査」を実施
 - ・調査期間：2024年5月10日～2024年5月22日

- ・調査方法：オンライン調査（85 名）、または郵送調査（10 名）
- ・回答者数：53 名（内訳：オンライン調査 46 名・郵送調査 7 名）

《4. 取り組みの結果》

1. 「神明園エンディングノート」 作成者数：9 名

- ・記入や内容の理解に多少の介助は要したが入居者が自ら記入できた
- ・普段の職員との会話では話題になかった終末期の希望や思い出話を聞くことができた

2. 「終活座談会」 全 4 回開催し延べ参加者数：41 名

主な内容は、僧侶を招いての講話「最期までどのように過ごしてゆけばよいか」、終活アドバイザー（ボランティア）との相談会など。終了後、入居者から「良い話を聴けた。今の生活に活かしたい。」「不安が少しだけど軽くなった。」「お墓について質問がしたい。また開催してほしい。」といった感想が聞かれた。

3. 家族アンケートの結果

エンディングノートの作成支援に約 9 割、「終活座談会」の開催に約 8 割の家族は肯定的に捉えていたが、中には認知症の進行により正確な本人の意思を汲めるのかといった疑問や不安を感じている様子が見られた。なお、明確に否定する回答はなかった。

《5. 考察、まとめ》

主観であるが過去には、高齢者施設では死に関わる話題を避ける傾向が顕著にあったと感じている。今回の取り組みは死をテーマとしながら、今生きているからこそ、入居者ができることに焦点を当てた。入居者自身が最期の迎え方を考え、相談し、形にできる環境づくりに、「神明園エンディングノート」の活用と「終活座談会」の開催は有意義な取り組みであることが確認できた。また、家族アンケートの結果より、多くの家族は園の取り組みを好意的に受け止め、入居者の終末期の意思決定プロセスにおいて職員と協働していける可能性が示唆された。なお、「神明園エンディングノート」という独自の様式を練り上げる過程で、職員が自らの過去、現在、未来に向き合う時間を持った結果、副次的に死生観教育としての効果が得られた。

今後は、家族が入居者と一緒にエンディングノートを作成したり、「終活座談会」に参加したりできるよう、家族へも開催案内を行なう予定。家族から「終活座談会」のテーマを募集するなど、より興味を持ってもらえるような働きかけも合わせて行ないたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行なうにあたり、本人に口頭にて、家族に文書にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「お坊さんドットコム」<https://obohsan.com/>（2023 年 12 月 19 日閲覧）、「福生市エンディングノート」（2023 年）福生市、「マイ・ウェイ～あなたの人生をもっとよりよく生きるための終活ノート～第 3 版」一般社団法人終活カウンセラー協会、『死とどう向き合うか』（NHK ライブラリー、1996 年）アルフォンス・デーケン、他

《8. 提案と発信》

エンディングノートをケアプランと連動させることにより、入居者本人の希望に沿った看取りケアの実践につながり、それは生活支援にあたる職員の安心感にもつながる。人生最期の迎え方を考えることは今の生き方を考えることであり、決して「最期の時」のものだけではない。このような取り組みが高齢者施設で広まり、入居者の生活の質の向上への一助となることを期待したい。